

欧米で学んだ最新の土木技術を活かして「駒沢給水塔」をつくった中島鋭治。
欧州で本物の宮殿を調査し「迎賓館赤坂離宮」をつくった片山東熊。
明治時代に海外へ渡り、そこで得た知識・技術をもとに、日本に新しい土木・建築をつくりあげた人物がいた。

偉人伝

the life of a great person

土木
建築

VOL.6

建築

「一八五四年～一九一七年」

片山 東熊

Tokuma katayama

明治西洋建築の代表作
「迎賓館赤坂離宮」を
設計した宮廷建築家



片山東熊は1854(嘉永6)年、現在の山口県萩市に生まれる。12歳で奇兵隊に入隊し、1868(明治元)年にはじまった戊辰戦争では、山縣有朋が率いる討幕軍に所属した。1873(明治6)年、工部大学校(現・東京大学工学部)造家学科に入学。お雇い外国人のジョサイア・コンドルに師事し、卒業後は宮内省匠寮に勤務。東京国立博物館や数々の皇室関係の建物を手がけたことから、宮廷建築家と称された。

1893(明治26)年に東宮御所(現・迎賓館赤坂離宮)の造営計画が具体化すると片山は1年余り欧州へ渡り、宮廷建築の様式を調査、研究した。1898(明治31)年には東宮御所造営局の技監に任命され責任者となる。片山は仏のルーヴル宮殿やヴェルサイユ宮殿に代表されるバロック建築に着想を得て設計し、1909(明治42)年に竣工した。2009(平成21)年、迎賓館は明治時代の西洋建築の到達点と評され、明治以降の建造物で初の国宝に指定されている。

片山は我が国最初の建築家の1人として西洋建築の研究に努め、日本建築界の礎を築いた。

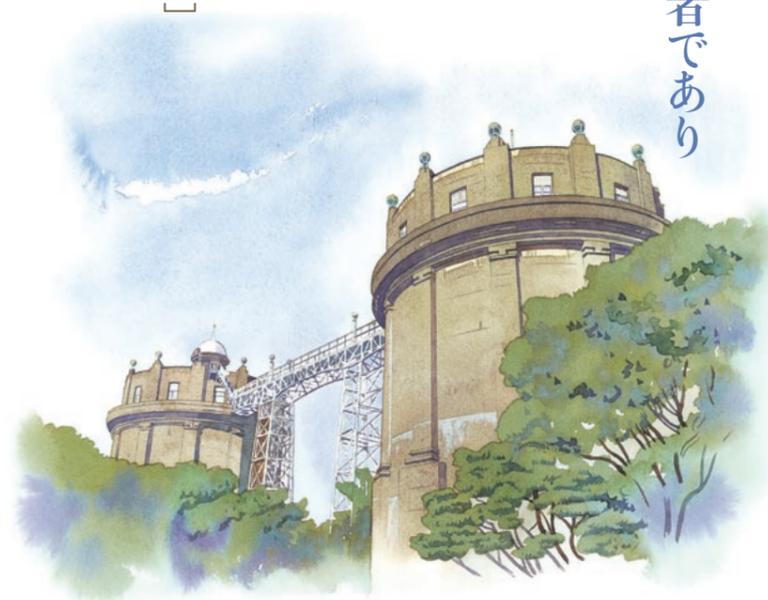
土木

「一八五八年～一九二五年」

中島 鋭治

Eiji nakajima

西洋建築を模した
「駒沢給水塔」の設計者であり
日本の近代水道の父



中島鋭治は1858(安政5)年、現在の宮城県仙台市に生まれる。1883(明治16)年、東京大学理学部土木工学科を首席で卒業。ただちに同学部の助教授となるが3年で辞職し、橋梁工学や衛生工学を研究するために米国へ留学。留学中、文部省の命で欧州に渡り、英・独で工学研究を続けた。1890(明治23)年、東京市に近代水道を整備する計画が決まると、欧米の最新の土木技術を修めた学識を期待され、急遽帰国を余儀なくされた。お雇い外国人のウィリアム・バルトンが設計した上水道計画を全面的に変更し、1892(明治25)年に着工、中島の指揮のもと1899(明治32)年に竣工。その後、大正初期の渋谷区では人口増加に伴い飲料水が不足したが、この問題解決のため中島は、ポンプで給水塔に押し上げた水を自然重力で送水する駒沢給水塔を計画。西洋建築をモチーフにデザインし塔の上部には王冠を模した装飾が施され「丘の上のクラウン」とも呼ばれた。

中島は欧米留学で吸収した最新技術を我が国に導入し、東京の水道の基礎を作り上げた。